

東京大学大学院人文社会系研究科  
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣  
帰国報告

平成 24 年 4 月 14 日提出

派遣生の基本情報

氏名 杉山 卓史  
所属先 美学芸術学研究室  
派遣形態 平成 23 年度冬個人派遣 PD

研究課題名

ドイツ啓蒙主義美学における「感覚」概念の研究

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

ドイツ連邦共和国イエナ大学およびアンナ・アマーリア公妃図書館（HAAB、ヴァイマル市）

(2) 派遣期間

平成 24 年 1 月 30 日～3 月 31 日（62 日）

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

本研究は、近年の美学研究における「感性的認識の学への回帰」——とりわけ、その際のカント（『判断力批判』1790 年）「以前」の諸理論への立脚——という方向を「感覚（*Empfindung* / *Empfinden*）」という概念に即して批判的に検証しようとするものである。とりわけ今回の渡航機会を利用して、ヘルダーの『人間の魂の認識と感覚について』（1778 年、以下『認識と感覚』と略）における「感覚」概念を詳細に分析・検討し、ここから啓蒙主義美学全体を見渡す足掛かりを得たい。

(2) 実際に達成された成果

まず、上述の研究計画を、派遣生の直近の研究成果（『美学芸術学研究』第 30 号、2012 年に所収の拙稿「美と倫理の結合子としての虚構—メンデルスゾーンの感覚概念をめぐって—」の独語版）とともに、ヴォルフガング・ヴェルシュ教授（イエナ大学哲学部哲学科理論哲学講座主任、現・名誉教授）に相談した。近年、人間を自然と精神の進化論的連続性の下に捉える思索を展開されている同教授は、認識と感覚とを連続的なものと捉える『認識と感覚』研究の意義を理解し後押ししてくださった。

次いで、『認識と感覚』の実際の読解を、イエナ大学付属図書館および HAAB 所蔵の各種の版に即して——日本では入手困難な、旧東独において出版された版本をも参照しつつ

——進めた。その過程で、かねてより進めていた日本語訳を、一応の完成にまでこぎつけることができた。

同時に、二次文献の収集・読解も進めた。その過程で、このテキストの1774年のベルリン・アカデミーの懸賞課題への応募論文としての側面を強く意識するようになり、同課題の出題者ズルツァーや入選者エーベルハルトら同時代の文脈の中にこのテキストを適切に位置づけてこそ、このテキストの正しい理解が得られる、という認識に至った。そのため、当時のアカデミーにかんする資料の収集も行った。

### (3) 今後の研究展望

- i) 『認識と感覚』の日本語訳を、邦語文献からの訳注を付して完成させ、公表する。
  - ii) 『認識と感覚』の、同時代の文脈の中に位置づけた新たな理解を、国内外の学会において発表する。
  - iii) 『認識と感覚』に至るまでの前中期ヘルダーの「感覚」概念の諸相を、さらなるテキスト読解を通じて明らかにする。
  - iv) 美学史における「感覚」概念の消去を（結果的に）もたらしたカントの「感覚」概念を、以上のヘルダーをはじめとする同時代の文脈に照らして、解明する。
- 以上を通じて、ドイツ啓蒙主義美学における「感覚」概念の諸相を明らかにしていきたい。